

聖書：ヨハネの黙示録 10：1～11

説教題：神のことばは甘くて辛い

日時：2021年4月11日（朝拝）

今、7つのラッパの幻を見ていて、前の9章では第5と第6のラッパについて見ました。次はいよいよ第7のラッパの幻となるところですが、第7のラッパは11章15節から記されます。それまでの10章1節～11章13節は挿入部分となっています。これは前に見た7つの封印の幻でも同じでした。第6と第7の封印の間に比較的長い挿入部分がありました（黙示録7章）。ここでは封印の幻の全期間、神の民に与えられている守りと慰めが語られました。それに相当する部分が今日見る10章と来週見る11章13節までの部分です。このラッパの幻では神を信じず、神に逆らう人々へのさばきが語られて来ました。そして第7の幻は主の再臨の日、最後のさばきの日を描くものとなります。その前に、神の民はこの全期間どうであるのかがここに示されます。特に神の民、教会に与えられている約束と使命が記されます。

さっそく内容を見て行きますが、1節に「また私は、もう一人の強い御使いが、雲に包まれて天から下って来るのを見た」とあります。この強い御使いとは誰でしょうか。ここに書かれていることはすべてキリストの姿を彷彿とさせます。「雲に包まれて」とありますが、雲はしばしば神の栄光の現れとセットで聖書に登場します。1章7節でもキリストはやがて雲とともに来られるとありました。また「頭上には虹があり」とありますが、虹は4章3節で天の御座についておられる神を描く際に出て来ました。また「その顔は太陽のよう」とありますが、これもキリストの姿として1章16節に出て来ました。また「足は火の柱のようで」。主なる神は荒野でイスラエルを導かれた際、昼は雲の柱、夜は火の柱となって彼らの間に臨在されました。そのことを思い起こさせられます。そして2節に「手には開かれた巻物を持っていた」とありますが、巻物は5章で子羊キリストが神から受け取っていました。また「右足を海の上、左足を地の上に置いて」とありますが、これは全世界への支配権を意味します。そして3節では「獅子が吼えるように大声で叫んだ」とありますが、5章5節でキリストを指して獅子と言われていました。このように読むと、この「強い御使い」は実はキリストご自身なのではないかと考える人が多いのは理解できます。しかしそうではないと思われまます。1節に「もう一人の強い御使い」と言われていますが、「もう一人の」とは、別の「強い御使い」がいたことを意味し

ています。5章2節に出て来ました。そこでは一人の強い御使いが「巻物を開き、封印を解くのにふさわしい者はだれか」と大声で叫んでいました。あの強い御使いと同じレベルのもう一人の強い御使いと言われていました。そしてあの5章の強い御使いはキリストではありませんでした。強い御使いの叫び声の後で子羊キリストが現れました。ですから今日の箇所「もう一人の強い御使い」もキリストご自身ではないと考えられます。また、この強い御使いからヨハネは今日の章で巻物を受け取りますが、この御使いがそのまま御使いであるとすると、1章1節とぴったり合致します。1章1節に、この黙示録のメッセージは神がキリストに与えたもので、キリストは御使いを通してヨハネに告げたとあります。それはしもべたち、すなわちクリスチャン全員に示すためにと。ですからここでヨハネに巻物を取り次ぐ存在は御使いであると考えるのは適切であると思います。

ではなぜこの御使いはこんなにもキリストに似ているのでしょうか。それはキリストに特に近くで仕える天使として、キリストご自身を映し出す者だったからということではないでしょうか。参考になるのはモーセがシナイ山で十戒を授かった時、彼の顔の肌が輝きを放っていたことです。神と会って神と話したためです。とするならキリストのそば近くで仕える天使がキリストを反映する者となっても不思議ではないと思います。この原則は私たちにも当てはまって来ることです。コリント人への手紙第二3章18節：「私たちはみな、・・・鏡のように主の栄光を映しつつ、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられていきます。」ですから私たちはここにキリストに似た姿を見て取って良いのです。あるいはこの御使いの姿からキリストがどのような方かを思い巡らして良いのです。特にここでは海と地を支配している姿が印象的です。この後、黙示録では海と地で色々なことが起こりますが、それに先立ってキリストがそれら一切を力強く支配しておられること。その姿をヨハネは幻の内に見させられたのです。

さてキリストを映し出すこの御使いは、獅子が吼えるように大声で叫びます。ライオンが吼える時とは、まさに敵と戦おうとする時で、これはキリストがいよいよ悪に最終的さばきをくだそうとする姿を反映するものでしょう。その叫び声に呼応するかのように7つの雷がそれぞれの声を発します。雷は旧約聖書でさばきの象徴として出て来ます。ここでの雷は単に雷の音がしたというのではなく、何かを語ったようです。ヨハネはそれを書き留めようとした。すると4節で天からこうい

う声がしました。「七つの雷が語ったことは封じておけ。それを書き記すな。」これは一体どういうことなのでしょう。おそらく雷が語った内容はこの世へのさばきに関係することでしょう。「7つの雷」とあるので、もしかするとすでに見た「7つの封印」、また今見ている「7つのラッパ」と同じような7つのシリーズに属することなのかもしれません。しかし「書き記すな」と言われて、詳細は示されていませんので、あまり詮索すべきではないと思います。それにしてもなぜ神はこのようにされたのだろうかと私たちは思うものです。これは改めて私たちにすべてが知らされているわけではないことを思い起こさせます。神はご自身の内に秘めておられることがある。ヨハネは書き留めようとしたわけですから、彼は何らかのことは知っていたに違いありません。しかし記してはならない！と言われています。似ているのはコリント人への手紙第二12章4節のパウロの体験です。彼は第三の天、パラダイスにまで引き上げられ、そこで人間に語ることを許されていない言葉を聞いたと言っています。彼にも、他の人に伝えることを禁じられたことがありました。当然ですが、神がなさっていることで私たちに知らされていないことは沢山あります。神は私たちに全部を説明しなければならないわけではありません。それを控えていることもあります。そういうこともあることを覚えて、神に委ねるように！ということはこのことは私たちに改めて教えてくれます。神は私たちに知らせないでいることも含めて、すべてのことを通してご自身の栄光を現し、私たちの益になるように導いてくださると信じていれば良いのです。

私たちは明らかにされていないことより明らかにされていることに注目すべきです。5～7節にかけて強い御使いが誓って言います。「第7のラッパの音が響くその日に、神の奥義は、預言者たちに告げたとおりに実現する！」と。聖書における奥義とは、長い間隠されて来たが、イエス・キリストにおいてついに明らかにされた神の福音、あるいは神の計画を意味します（ローマ16章25～27節、エペソ3章3～11節）。その神の奥義が第7のラッパにおいてついに実現する。預言者たちが告げた通りに。遅れることなく！と。この世界の歴史には色々なことが起こります。理不尽なことも多く起こります。主を信じ、信仰の歩みをしていても報われないように感じる時もあります。いつまでですか！主よ！と叫びたくなる時もあります。しかし神の計画は神が定めた日に、遅延せず、確実に成就する。御使いはそのことを誓って語っています。私たちはこの強い御使いの誓いを心に焼き付けて、最後の日は定められた日に確実に、延ばされることなく来る！と確信させられたいと思ひ

ます。

さて8節に、それから天から聞こえた声が再びヨハネにあったと記されます。「御使いの手にある、開かれた巻物を受け取りなさい」と。この巻物はすでに2節で、あるいは次の9節10節で「小さな巻物」と言われています。果たしてこれは5章に出て来たキリストが受け取った巻物と同じかどうかについて学者たちの間に議論があります。ある人たちは「巻物」と訳されている言葉と「小さな巻物」と訳されている言葉はギリシャ語で異なるが、意味に大きな違いはないとして、これら二つは同じものを指すと言います。一方、ある人たちはここでは「小さな巻物」と言われているから、5章に出て来た「巻物」の一部分だったのだらうと言います。いずれであれ、これはキリストが先に受け取った巻物と別種類ではなく、本質は同じものと考えられます。さらにその巻物を「食べよ」とヨハネは言われます。後に見ますが、これと関係が深いのは旧約の預言者エゼキエルです。彼もそのように命じられ、そのようにしました。この巻物を食べるとは神のメッセージを自分の最も深いところに取り入れ、消化すること。そしてその御言葉と一体化することです。その御言葉に服する者となることです。

注意を引くのは、それは「あなたの腹には苦いが、あなたの口には蜜のように甘い」と9節で言われていることです。苦くもあり、甘くもある。そしてヨハネが食べたらどうだったでしょう。10節に、最初は口に蜜のように甘かった。幸せな体験が先に来ます。ところがその後で腹は苦くなった。そちらの感じの方が残った。これは何を意味しているのでしょうか。蜜のように甘いというのは良く分かると思いません。詩篇19篇7～10節：「主のおしえは完全でたましいを生き返らせ、主の証しは確かで浅はかな者を賢くする。主の戒めは真っ直ぐで人の心を喜ばせ、主の仰せは清らかで人の目を明るくする。主からの恐れはきよく、とこしえまでも変わらない。主のさばきはまことであり、ことごとく正しい。それらは金よりも、多くの純金よりも慕わしく、蜜よりも、蜜蜂の巣の滴りよりも甘い。」さらに有名なのは詩篇119篇97～104節でしょう。119篇103節：「あなたのみことばは私の上あごになんとも甘いことでしょう。蜜よりも私の口に甘いのです。」神のことばは確かにそうです。この世のどんなものより甘美なものです。それはすべてに勝る神ご自身を知る喜びを私たちに与えます。混じり気のない純粋な蜜を味わうように、神の聖さを知り、正しさを知り、その慈しみ、愛、知恵、力、崇高さを味わいます。それはこの世の

どんな楽しみ喜びをもはるかに勝るものです。しかしそれだけではありません。神のことばは甘いも苦いとも言われています。参考になるのはエゼキエル書 2 章 8 節です。エゼキエルはそこで神から「あなたの口を大きく開けて、わたしがあなたに与えるものを食べよ」と言われます。そして彼が見ると、そこに一つの巻物がありました。その表にも裏にも文字が書かれていて、そこに「嘆きと、うめきと、悲痛が記されていた」と 10 節にあります。そして 3 章でエゼキエルはこれを食べます。すると 3 章 3 節にある通り、それはまず口の中で蜜のように甘かった。しかしそれで終わりではありません。そのことばをイスラエルの家に行って語れ！と言われます。4～7 節を見ると、特に 7 節にある通り、彼らは聞こうとしない、反抗すると言われています。そして 11 節で「彼らが聞いても、聞かなくても、『神である主はこう言われる』と彼らに言え」と言われます。それは彼らにさばきをもたらすものとなります。それはエゼキエルにとって苦いことです。14 節に「苦々しい思いで行った」とあります。これはイスラエルに遣わされたエゼキエルの話ですが、黙示録では全世界の人々に告げるようにヨハネは言われます。そのメッセージは受け入れない人々にさばきをもたらすこととなります。ある意味でそのさばきの実行にも甘いという側面はあるかもしれません。そのことによって神の正義が実行されます。また虐げられていた神の民が救われます。しかし人々の反抗に接し、彼らの上に臨むであろうさばきを思うと、やはりそれは苦い感覚を彼に与えることとなる。イエス様もルカの福音書 19 章 41 節でエルサレムを見て、その町に臨まざるを得ない厳しいさばきを思い、都のために泣きました。イエス様も苦さを味わっておられました。そしてこの苦さには、神のことばを伝える者たちが反抗する人々から受ける苦難や迫害のことも含まれるかもしれません。ヨハネはそれらのことを思ってグツと腹の中で苦さを経験したのです。

その彼に最後 11 節で、この言葉をもっともう一度預言せよ！と命じられます。ヨハネはこれまでも神のことばを伝えて来ましたが、ここで改めて派遣されます。預言するとは単に将来起こることを告げるのではなく、神からの言葉を取り次ぐことです。多くの民族、国民、言語、王たちに、とされています。これまで民族、国民、言語、部族の 4 つが一まとまりの表現として使われて来ましたが、5 章 9 節では救われる人々がすべての部族、言語、民族、国民から起こされると言われました。7 章 9 節では救われて天にいる民が、すべての国民、部族、民族、言語からなることが示されていました。ですからヨハネが語る言葉によって、救いに至る人たちも

そこから起こされるでしょう。一方、他の人たちは受け入れず、反抗します。11章9節には逆らう人々として「もろもろの民族、部族、言語、国民に属する人々」と出て来ます。13章7節でも悪魔の支配下にある人たちとしてこの4つが出て来ます。この4つの中の一つがここでは「王たち」に置き換えられています。それはヨハネが受け取った神のことばは世界の最も地位の高い人々にも語られなければならないということを示すのかもしれませんが。しかし「王たち」という言葉で特に考えられているのは、当時キリスト教会を迫害していたローマ皇帝ドミティアヌスでしょう。しばしばこの世の王たちが神に逆らって立つことがこのあと言われます。そういう中でも、神の御言葉をその通りに語れ！と言われています。この命令に従う教会の姿が次の11章に記されることとなります。歴史の中で、教会の宣教はどう展開されるのか、そのことを次回、挿入部分の後半で見ることとなります。

以上の箇所から今朝受け止めたいのは、神の奥義が実現する最後の日までの私たちの使命についてです。ラッパのさばきが地に行われる間、私たちはただ傍観していれば良いのではない。私たちには役割、使命が与えられています。神からキリストへ、そして御使いを通してヨハネに与えられたみことばは、しもべたちにと与えられたものであって、神のことばを宣べ伝えるように！という11節の命令は、私たちみなに当てはまるものと言えます。まず大切なことは自らこれを取って食べるようにして、自分自身の中に日々取り入れること。食べ尽くし、咀嚼すること。そしてこのみことばと一体化し、このもとの生きる者となること。その際、覚えるべきは、この神のことばには甘さと苦さの両方があるということです。神のことばは確かにこの上なく甘いものです。私たちの心を喜ばせるものです。その素晴らしさを私たちは日々食べて味わい、その喜びに押し出されて歩む者となるべきです。しかし同時に苦さもあると言われました。もしこの苦さを否定したり、そんなものはないかのように誰かに語っているとしたら、私たちはこれを正しく受け取っていないし、正しく伝えていないことになる。むしろ勝手に改変改悪していることになる。神のことばは確かに甘い、苦さもある。「それを食べてしまうと、腹は苦くなった」とありました。これが神の御言葉を正しく受け取った者たちの経験です。歴史の教会はこのことに確信を与えられながら神のことばを宣べ伝えて来ました。私たちもこの時代にあってヨハネと同じ経験をさせられつつ、しかしそれで困惑させられるのではなく、かえって確信を与えられ、最後まで福音を忠実に宣べ伝えて神の最善のご計画がなるために用いられる教会の使命と光栄に生きる者たちとされたく思い

ます。